

## 珍しい古墳/歩く会 神社の絵馬 2月例会概要報告

2月例会は、2月24日(土)13時30分から市役所北館市民協働センターで開催され32名が参加した。

発表Ⅰは、福村博士氏が「全国の古墳巡りー珍しい古墳の話ー」と題し、各地の古墳の形態や装飾埴輪の珍しい古墳を紹介した。

牽牛子塚古墳(けんごしづかこふん)は、奈良県明日香村にある古墳。形状は八角墳。出土品は国の重要文化財に指定されている。

キトラ古墳は、藤原京の南にある大陸風の壁画古墳で、石室内に18個の凝灰岩の切石を組み上げた石室があり、四神、十二支、天文図、日月の壁画がある。キトラとは亀虎を指す。

今城塚古墳は、大阪府高槻市にある前方後円墳で、他に類を見ない埴輪祭祀場に復元埴輪を配置して再現している。

上記古墳は、福村氏が紹介された一例であるが、古墳と歴代天皇との関連を交え話した。

発表Ⅱは、今田幸博氏が「八本松3神社の絵馬」と題し、「第38回東広島の史跡文化財を見て歩く会」で巡る「清水川神社4面」、「川上神社16面」、「疱瘡神社3面」計23面の絵馬を紹介・解説した。奉納年月日を時代別にみると、江戸時代1面、明治時代3面、大正時代2面、昭和時代8面、不明9面であった。参加者は、今田氏の絵解き解説を聞きながら、絵馬の形態や種類の多様さ・奉納絵馬の設定場面を理解し、絵馬への興味関心が深まった。歩く会が楽しみである。

### <2月例会参加者(敬称略)>

木原敏博、藏楽知昭、藏楽恭子、谷本操、今田幸博、中川平介、菅野晃行、吉村鈴枝、近藤孝美、赤木達男、中村健治、藤原美春、山地悦子、光田清志、國松宏史、丸本富美子、堀内幸子、国永昭二、天野浩一郎、三嶋昇、西本嘉住、船越雄治、近藤英治、上野洋司、穴戸元文、重竹訓江、角谷勉、福村博士、進藤真由美、実井研治、吉田泰義、大森美寿枝(以上32名)

### 50周年記念実行委員会 出席のお願い

日時 3月23日(土) 10:00~  
場所 市役所北館1階 市民協働センター  
県史協東広島大会の準備、分担等を全郷土史会員で協議します。ぜひ出席ください。

## 日本最後の酒都「西条」

松木 津々二

まちの歴史というものは、そこに暮らす人たちが、次世代へと大切に伝えていくから残るものです。だれかが残してくれているだろうと、みんなが思っていて、気がついたら誰も残していないことがわかる。すると百年経つと、そのまちの歴史は消えてしまうのです。なぜなら、百年前のまちのことを覚えている人は居なくなるから。私は郷土史を研究するにあたり、そのことを痛感させられたのが、「酒都西条」と言われた街の歴史だったのです。

今では「西条酒蔵通り」と呼ばれ、市内随一の観光名所になっている白壁の酒蔵と赤い煉瓦の煙突が建ち並んでいる「酒造りの街」。そして市民の誰もが知っている「酒都西条」という言葉。



酒都西条と書かれたタクシー

しかし、酒都西条の本当の意味を誰が知っているのでしょうか？

この日本酒造りの町「西条」の全盛期の時代は、今からちょうど百年前のことです。そのころにどういう酒造元が何軒あり、どういう銘柄がいくつあり、それらの酒が全国でどのような高い評価を得ていたか?・・・など、誰も知らないのです。今語られているのは、今もある銘柄の酒とその酒造元の話だけ。しかもその銘柄の酒も、戦後のことくらいしか知られておりません。「酒都西条」とは、戦後の高度経済成長期に言われるようになった「三大銘醸地(酒処)」

### 3月例会のご案内

日時 3月23日(土) 13:30~  
場所 市役所北館1階 市民協働センター  
発表 「歩く会の見どころー八本松・川上」  
歩く会実行委員会 資料班

と同じものだと思って、「灘・伏見と並ぶ酒都西条」と言っている人が居ます。西条が「酒都」と言われるようになったのは、大正から昭和の戦前のこと。そのころの西条町は、西は寺西村、東は吉土実村、南は御菌宇村に囲まれた東西幅800メートルの小さな町域です。一方、戦後の西条町は近隣の町村と合併して、西は広島市、東は竹原市、南は呉市とも境界を持つ、戦前の50倍近い広さを持った町域です。ですから「酒都西条」と古い文字で書くのが正しいでしょう。酒都西条は戦前の西条町が日本一の銘醸地になった時の称号で、三大銘醸地の西条は、戦後に灘と伏見に次いで日本酒の生産量で第三位になった時のことを言っているわけですから、まったく別のものを今は一緒くたにして語っているのです。それは、今も酒蔵の建ち並ぶ酒造りの街が、黄金時代でもあった戦前の歴史そのものが、消えてしまっていることを示しているのです。

それでは、日本の「酒都」とは何でしょう？それは日本酒づくりの首都（中心地）を意味します。首都は一国に一つ。ですから「灘・伏見と並ぶ」なんてことはありません。ただし、都（首都）は時代とともに遷都していくものです。私たちが歴史の時間で習った「○



奈良市の郊外にある「日本清酒発祥之地」碑

○時代」という中に、そのアタマに地名が付いていませんか？・・・「江戸」とか「安土・桃山」とか・・・、つまりその時代の政務を執り行った所の地名が付いている。言い換えるなら、その時代の国家づくりをリードした地名が付いているのです。その時代ごとの日本国づくりをリードした地名（都市）こそが、その時代の首都を意味しているのです。この「日本国づくり」の「国」の文字を「酒」に代えてみてください。すると「日本酒づくりをリードした地」になりませんか？・・・それが「日本の酒都」を意味し、その時代ごとに主流となった日本酒づくりの技法（醸造法）を生んだ地を指します。ですから、その主流となった醸造法のアタマにも地名が付いているのです。「○○流△△造り」という名で。残念ながら「西条」という地名は入ってはいませんが、最後に登場した醸造法には、「広島流吟醸造り」と広島の名が入っています。その「広島流吟醸造り」が生まれ全国の酒造りをリードした地が、広島「西条」であったのです。

日本の酒都の変遷

日本酒という言葉は明治になって生まれた名で、本来は「清酒」と言い、「清んだ酒」を意味します。これは室町中期に奈良で生まれ、「奈良流諸白造り」の名で戦国から江戸時代までの酒造りの主流でした。しかし江戸中期には、伊丹で生まれた「伊丹流寒造り」が主流になり、



奈良流に取って代わるのです。ところが、幕末になって兵庫の灘で「灘流生酛造り」の酒が生まれます。これこそが現在の日本酒の始まりなのですが、当時の技術では灘以外の地では造れなかったのです。それで別の方法で灘のような新しい清酒を造る技法を編み出したのが、安芸津の酒造家「三浦仙三郎」だったのです。この仙三郎が亡くなった後に、この技法をさらに進化させ、「広島流吟醸造り」に仕上げたのが、広島の西條という街だったのです。そしてこの醸造法を全国に広めることになったのが、「木村静彦」を中心とした西條の酒造家と「橋爪陽」と「佐竹利市」という技術者であったのです。



西條酒造学校の看板と初代校長を務めた木村静彦の銅像

日本の酒都の変遷は、戦国時代に奈良で生まれ、元禄時代に伊丹に移り、幕末には灘に、そして大正になって広島の西條に移ったが、その後の戦時・戦中・戦後のヤミ酒時代と米不足に苦しむ中で、酒造りの技術は途絶え、その後は「酒都」の概念は消えてしまいました。一度消えてしまった歴史を復元するのは、大変な時間と労力を要します。しかしお陰様で多くの協力者を得て、このたび復元することができました。20年に及ぶ歳月を掛けて、全盛期の酒都西條（日本最後の酒都）の街の姿を前ページの地図にして表してみました。

## 第69回山城探訪会は新春座談会

吉田 泰義

令和6年（2024）1月20日（土）午後  
西条町下見 三ツ城地域センターで開催。  
蔵楽、上野、大森、吉原、重竹、三宅、吉田

- 1、紙芝居『東広島の西国街道 絵物語』  
原画30枚を順に掲げながら紹介。
- 2、『東広島の山城』第2集編集中の報告  
第41回～第70回迄の寄稿文を製本化
- 3、東広島の歴史を伝える 紙芝居製本化  
20年間に作成した24作より10作  
(時代順) 紙芝居タイトル
  - ①福成寺縁起
  - ②絶世の美女菖蒲前物語
  - ③幸熊丸（こうがまる）伝説

- ④高屋の平賀氏三城物語
  - ⑤西条 鏡山合戦物語
  - ⑥毛利×大内 榎山合戦物語
  - ⑦志和堀 天野隆重物語
  - ⑧東広島の西国街道 絵物語
  - ⑨木原秀三郎と神機隊
  - ⑩明治維新の先覚者 宇都宮黙霖
- ※10作品書式がバラバラなので統一  
書式は、横書き、1頁に絵、文は見直し  
本はA4又はA5、150頁程度  
白黒かカラー、発行部数は200部  
印刷見積もりなど今後検討

### 4、今後の予定

- 3月16日（土）安芸津町風早大芝島  
4月お休み、5月18日（土）、  
6月22日（土）、7月20日（土）、  
8月お休み、9月21日（土）

### 5、「昔の道探訪会」に名称変更

古墳、山城、神社、仏閣、古道などを探訪し「温故知新」楽しみましょう。

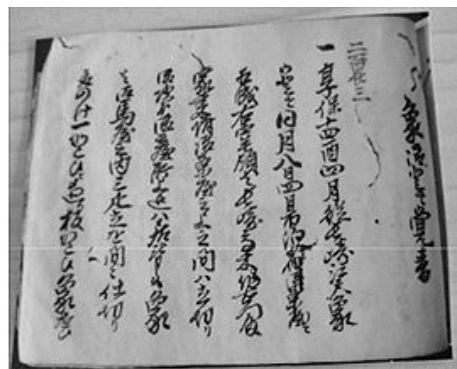
## 【広島を歩いたベトナム象 7】

—ベトナム象、西条四日市宿に泊る—

赤木 達男

ベトナムの雄象（推定8歳）が長崎を発って27日目の享保14年4月8日（1729年5月5日）夕刻、江戸までの1/3弱の道のり115里（460km）にあたるわがまち西条四日市宿に着きました。気候風土や言葉が異なり、味わったことのない水や食べ物に戸惑い、好奇心に満ちた奇異な目に晒されながら異国での旅を続けてきたベトナム象は、どんな思いで四日市宿に入ったのでしょうか。

きっと、宿場の人々の心温まるもてなしに旅の疲れを癒やし、西条つ子と四日市宿のことを好きになってくれたことと思います。



その記録が木原家（注1）の文書に「象御登せ覚書」として残されています。上の写真は東広島郷土史研究会の先輩、菅野晃行さんに戴い

たものです。

「一 享保14年4月、長崎から江戸に登る象が4月8日、四日市宿の御茶屋（注2）に泊まった。宰領の高木作右衛門と家来は御茶屋の上ノ間、その他は台所の上の間に泊まった。象は御馬屋の馬3匹の間仕切りを取り除き板で囲った。象遣い4人も馬小屋に付き添った。一 御代官の松原助佐衛門様がお越しになり、宿で諸事について仰せつかった。」と書かれています。なんと、御代官様が象の宿に付き切りで接待したのです。

象を迎えるにあたって長崎奉行所からあれやこれやのお達しがあり、準備万端整えなければなりません。

中段の地図は安永9年（1870）頃の四日市宿の地図です。西国街道（旧山陽道）を西から上ってきた象は半尾川を渡り、中央やや右の本陣（御茶屋）に入ります。当時、半尾川に架けられていた橋は恐らく小さな土橋か板橋だったと思います。長崎奉行所は街道筋の各藩に3、4余りの象が渡る橋の補強について、「一 土橋、

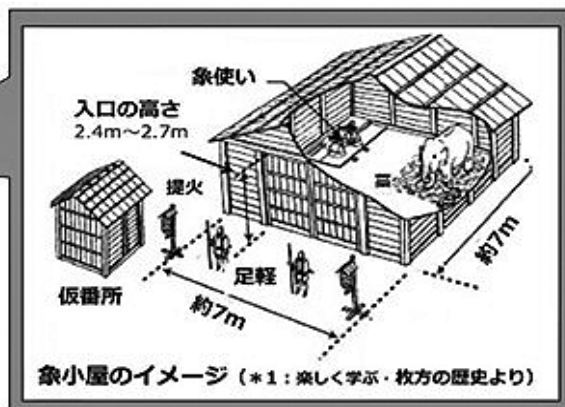
薄き板橋、薄き石橋などは厚さ6～7寸（18～21cm）の角材を平らに並べ、その上に薄く土を敷き、「欄干がない橋は取り付けのように」と「御触書」を出しています。

四日市宿でも半尾川や古川の橋補強工事が慌ただしく進められたことでしょう。

### 至れり尽くせり 象の寝所

橋を補強する作事にとどまりません。四日市宿の“てんやわんや”は、まだまだあります。馬小屋を改造した象小屋づくりもあります。下の図は竹内家（注3）文書に残された「御茶屋の間取り図」です。中央右辺りに馬小屋が設えられています。先に見た木原家の文書は、この「馬小屋を象小屋に改造した」と伝えています。

「御茶屋の間取り図」の右は「享保の象、枚方市を歩いた日」からお借りした象小屋のイメージです。枚方でも「一 高サ八尺余、入三間程、横 式間半程、内、一間半程象出入口」という長崎奉行所の「御触書」に基づいて小屋が作られていたことが伺えます。



さらに「御触書」には小屋の形状や番所と足輕の位置だけではなく、「一 小屋に（隙間）風が入らないように、小屋内の地形は片方を少し下り（低く）するように、象は度々小便するので溜まらないようにすること。一 小屋の中に藁を式尺（60cm）程敷き、昼夜役人が付き添うように」など、事細かな指示が書かれています。

象の寝床に注目してください。何やら敷き詰められています。小便で濡れないように藁が敷き詰められ、傍らには象使いが控えています。

これも、大きな物音に驚き象が暴れだしたことから、長崎奉行所が出した「付添いの者別宿これ無きようにと存じ候、勿論、象遣いの者象小屋の内に付添い候ように至さるべく候」という「追触」が忠実に守られていたことを物語っています。

### 大飯喰らいの象 飼料に四苦八苦

人間にとって欠かすことのできない衣食住、象にとっても衣はともかくとして食住は不可欠です。住は整いましたが食（餌）が大変です。なにしろ想像を絶する大喰らいです。長崎奉行所の「御触書」にある餌を表にしました。

品名	数量	換算	品名	数量
新藁	150~200斤	90~120kg	大唐米	8升
笹の葉	150斤	90kg	餡無しまんぢう	50個
いたぶ葛	140斤	84kg	餡入りまんぢう	50個
ひめ草	60斤	36kg	湯水(清水)	9升
胃麦	20束	—	焼酎	2~3升
九年母	30個	—	煤(すす)	1升ほど
檀(ダイダイ)	50個	—		
芭蕉(バナナの葉のような植物)	2本	—		

勘違いしないでください。これは一日分です。大量の植物類、お粥にして冷ました米8升、餡入饅頭はこのほか好物だったようです、焼酎(酒)も好物で多い時には9升も呑んだそうです。

右段の囲みは木原家に残された古文書の一部です。藩の代官から準備するように指示された象の餌です。「いたぶ葛 右は大きな松或いは大石（岩）などに有る」と書かれています。右上の写真が「いたぶ葛」ですが、私にはどのような植物なのかよく分かりません。



ネットで検索すると「みんなの趣味 園芸」に「子供の頃、良く食べていたイタブ(イヌビワ)。散歩道になっていたのを思い出し立ち寄ってみました。黒く色付いて食べ頃の実がなっ

いたので食べてみました。甘いけど微妙。もっと熟さないといけないのかな。子供の頃はもっと甘く感じたのですが……こんなものなのかな。」とありました。現在はイタバカズラと呼ばれます。

私も子どもの頃、野山でたいていの実や葉、茎などを食べましたが、記憶にありません。

いずれにしても、大量の餌確保です。

代官様の指示で宿役人の“てんやわんや”、“四苦八苦”する姿が目には浮かびます。

### ちょっと余談

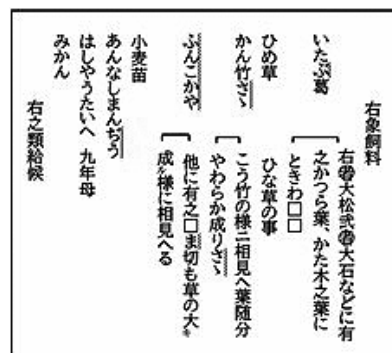
とんでもない大飯喰らいの象の糞も桁外れに大量です。安佐動物園を訪ね、象の習性や生態についてお聞きしていたところ、目の前でアフリカ象が円を描くように歩きながら“ボタ、ボタ”と糞を始めました。すごい量です。「象は歩きながら糞をするのですか」とたずねると、「あの子は歩きながらしますが、他の象はそうではありません。個体によって様々です」とのことでした。

糞の量は「一つの“ボタ”が1kg余り、一回に7~8“ボタ”するので1回に約10kg、一日に200kgの糞をします」とのことでした。

江戸への道中を記録した文書に糞のことに触れた部分がなく、以前から気になっていました。おそらく糞処理係が付いて歩いていたら、

街道筋の村役人が手配し処理したのでしょう。この糞は江戸に着いたベトナム象の数奇な運命とも関わってきます。

安佐動物園と福山動物園でお聞きした象の習性と生態は、書き進める中で折を見てご紹介します。(つづく)



#### (注1) 木原家

東広島市高屋町白市にあった白山城の支城、高屋東木原城 木原美濃守保成の子孫。江戸時代初期から醸造業や塩田業、両替商を主とした豪商。

#### (注2) 御茶屋

広島藩が設置した大名や幕府要人の宿泊施設(本陣)の呼び名。藩内に9つの御茶屋(本陣)が置かれたが、西条四日市宿の「御茶屋」が最も大きかった。

## (注3) 竹内家

江戸後期、賀茂郡吉川村の庄屋に任命されて以降明治維新を迎えるまで勤めた。他村の庄屋や賀茂郡の割庄屋も勤めた。

来て！見て！知って！  
私の町にある歴史の跡

Vol. 3

## 「小松古墳（小松西第七号墳）」

進藤 真由美

実家のすぐそばに、近所の方が漬物壺を並べる洞穴がありました。夏涼しく冬暖かいその洞穴は「小松古墳」という、石室長約8.5m、玄室長約4.8mの円墳です。昔はよく潜り込んで遊んでいましたが、今は立ち入りが制限されてしまいました。

目立つものなど何もない田舎で生まれ育った私には、そんな立派な古墳を作ってもらえる豪族がこの地にいたことがとても不思議に感じられたものです。

大人になり、私は古墳のファンになりました。その原点はこの円墳であり、私にとってはどんな巨大な墳丘よりも大きな存在です。



## お詫びと訂正

四日市町並研究会の開催日程につきまして過去2ヶ月に渡り、間違った情報が掲載されました。また、開催回につきましても長期間に渡り、誤った回数を掲載しており、今月号より正しい回数に訂正させていただきました。不正確な情報を掲載いたしましたことをお詫びし、再発防止に努めて参ります。

## グループ研究会ご案内

## 第284回 古文書研究会

と き 3月19日(火) 13:30~  
ところ 市役所北館 市民協働センター  
テキスト 国郡誌御用書上帳賀茂郡奥谷村②

## 第183回 石造物研究会

と き 3月26日(火) 9:00~  
臨地研修 (福富・河内町)

## 第180回 四日市町並研究会

と き 3月11日(月) 10:00~  
ところ 西条本町歴史広場 小島屋土蔵  
「酒都西條」パワーポイント作成

## 第70回 山城探訪会

と き 3月16日(土)  
集 合 鏡山公園第2駐車場 9:00集合  
安芸津支所1階ロビー 9:30集合  
内 容 大芝島の河津桜や島巡り  
※3/11までに要申込 (吉田、大森まで)

## 原爆資料保存研究会

と き 3月21日(木) 14:30~  
ところ 市役所北館 市民協働センター

## 3月の図書室開放

と き 3月15日(金) 13:00~15:00  
ところ 高屋教育集会所

ひがしひろしま郷土史研究会ニュース  
第595号

令和6年(2024)3月5日発行  
編集・発行 東広島郷土史研究会

会 長 赤木達男 TEL(082)423-7235

E-mail:akataku@d4.dion.ne.jp

事務局長 國松宏史 TEL090-7979-6234

E-mail:kunimatsu402@hi3.enjoy.ne.jp

会報編集 間瀬 忍 TEL080-5756-2303

E-mail:mase shinobu@yahoo.co.jp